

作文

【小学校高学年の部】

優秀賞

「ぼくのおじまんのおじいちゃん」

登米市立南方小学校

五年

たかはし
高橋

りゅうせい
龍生

ぼくのおじいちゃんは緑内障という目の病気です。だんだん視野がせまくなつていくそうです。ぼくがもしそうになったらこわくてなかなか外に行けなくなると思うけど、おじいちゃんは一人で電車に乗って、仕事や病院、しゅみで始めた尺八教室に通っています。

ぼくが遊びに行った時、こんな話をしてくれました。

「この前道を歩いていたらね、とつぜん目の前に人がいておどろいたんだ。」

その人は歩きスマホをしていて全く前を見ていなかったのです。おじいちゃんは遠くが見えないのであぶなくぶつかりそうになったと話していました。歩きスマホは本当にあぶないなと思いました。

その他にも、駅の電気が消えていて階段が見えなかった事、少しの段差でも転びそうになるなど、ぼくからすれば、普通の事でも、おじいちゃんにとっては大変な事なんだなあと思いました。

それなのに、ぼく達が遊びに行くと、いつもニコニコしながら、

「おー、よく来たなあ。」

と言って出むかえてくれます。そして、見えないながらも一緒にしようぎをして遊んでくれます。コマが小さくてよく見えないので、ぼくに何回も、

「これは何だ。」

と聞いてくるけど、ぼくは全然嫌じゃありません。線が見えないのでよくずれて置く事があるけどそれも嫌じゃありません。

「じいちゃん、こっちだよ。」

と言って笑いながら直してあげるのが大好きです。

家族だからではなく、だれにでも自然に手をかしてあげられる人にぼくはなりたいです。